

## 武姓文書

著者	球陽研究会
雑誌名	沖縄文化研究
巻	7
ページ	198-215
発行年	1980-06-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00015560">http://hdl.handle.net/10114/00015560</a>

## 武 姓 文 書

球 陽 研 究 会

ま え が き

この文書は東恩納文庫において、富島壮英、名嘉順一、糸数兼治、曾根信一、渡口真清、嘉手納宗徳、島尻勝太郎がこの正月読み合せをしたものである。半紙大の紙二十一枚に筆書されたのをゼロックスでコピーしてある。後編の半分は下書であり、残り半分は半ば清書されている。両者は殆んど同じ文章であるが、清書された方には少しばかり記事がふえている。その事を表わすために、ここでは「追加」の印をつけておいた。その内容には、崇禎、順治、康熙始め頃の、家譜のまだ出来ていない頃の、云わば士農不明確な時代の、士の様子が見られユニークな記事が数多く記されているので、これを眠らせておくにしのびず、ここに記載することにした。登場人物については、既に『那覇市史』

資料編第一卷五に公表されている。

「武姓文書」本文

前編

(一)

(1) 江列按司与妹つきおやのろ設兩墓一所西是つきおやのろの墓東是按司墓俗ニ称野国按司与墓之内有中華碧黒石宝龕以収世□□

(2) 江列森城(墓図)

野国親雲上—野国親雲上—嘉陽親雲上

江列按司—江列—座安掟親雲上—小橋川掟親雲上—

東 按司墓—母せりきよ

此孫之祖母迄 此小橋川より  
此墓ニ骨納ス 首里江住居

西 妹墓—妹 つきおやのろ

代々のろ此墓一所ニ相用來候

(二) 江刈城ニ而祭之時神拝申礼式之次第

(1) 一、祭之日土城御嶽之おかへ相済殿座江祝(祝)被致省候へハ出合之人数四タ拝仕魚のおみさゝけ殿庭江かたけ立帰右之宰領二人海せど一人袖仕被出立拝ニ而旧例のおみさゝけ上申御案内申上候得ハのろより旧礼のおむろ被相諷相済候へハ大(右)魚ニ而鱸相調おむろニ相見得候様出合之諸人江銘々祝肴ニ往古より仕付来候通会釈有之何連茂五水頂段々之旧式相勤候

一、仙香一結

一、上白米之みハ那九合

一、五水六合 上酒三合瓶一對 三行殿座江□申

(2) 一、森城之両墓江御香斗ニ而焼香

右由緒之趣ヲ以嘉陽永安、真境名、奥原、浦崎兄弟、大城兄弟一門何連茂取合一年越ニ賦合ヲ以夏兩祭之内一度被差越朝八卷之支度ニ而相拝申旧礼仕付来候通孫々無懈怠可相勤候 以上

己酉 八月廿五日

後編

(一) 系図之儀ニ付而御尋之趣承知仕申上候覚

(1) 私共祖父大城筑登之事、実父富名腰村大城宇江親雲上より首里江居住ニ而御奉公之所存有之、

野国親雲上宗清ハ大城宇江兼而好ミ之儀共御座候而、幼少之頃より頼存彼所江罷居申候。

然処新川親雲上事嗣子無之<sup>ニ付</sup>現存之時大城掣猶子<sup>ニ而</sup>家統相続仕候処、病氣を以致早死候<sup>ニ付</sup>女性<sup>ニ而</sup>子供都而之介抱難成故、真境名親雲上奥原親雲上成人内本生祖父大城宇江願養育<sup>ニ候</sup>処、大城宇江無間も相果候<sup>ニ付</sup>彼掣山川大屋子江遺言<sup>ニ而</sup>介抱致させ候内、御手札改有之一節富名腰村江御手札差越申候。然処致成長候故追而叔(祖)父野国親雲上より御断申上首里江引越為申由候弥系図<sup>ニ</sup>相見得候通何ぞ別条無之候此等之御断御引当之為御評定所日帳拔書一通相伺候上差出申候。右之旨趣御申上可被下候以上

申四月

(2) 追加(清書にあり)

申四月十一日

永安

真境名親雲上

奥原親雲上

浦崎親雲上

(3) 追加 押札

康熙四年十二月六日巳日御評定所御日記拔書

野国親雲上より以覺書被申候新川孫大城兄弟前々首里内翁長村久高與之内居申候処父親死申候付不自由候故玉城間切舟越むら山川大屋子甥罷成越居申候間如前々居付かせ可被下由託言申候条右之通御談合相濟兼城を以改奉行衆江申渡候事

(4) 押札ニ康熙四巳年御改之時御条書ニ相見申候

間切々々ニ居住之士如先改居所ニ而札取候様可申付事

(5) 追加 押札

間切々々江居住之士首里江被召揚候衆ハ其人躰之父母之外兄弟并縁者親類等此中ハ縦雖為家内札此節相除本之所ニ而札可被出事

(6) 此通之仰渡ニ而候ヘハ順治十七子年御改之時御法之通弥於居所御手札取申候

(7) 追加 押札

真境名親雲上奥原親雲上幼少之時富名腰村江差越又ハ首里江引越候時訟書有之候ハハ差出可申旨被仰付候ニ付其節宗門御改付而ハ田舎江居住之士各居住ニ而御手札可取旨御条書ニ相見申候右式候得ハ其節之御格を以御断申上罷下為申ニ而□□御座候又ハ首里江引越候儀ハ訴書を以相濟為申由相見申候尤右上下之訟書之儀後來ニ相係証拠仕儀ニ而茂無之其場付届さへ相濟候得ハ永々覺語不及申殊更近年之事ニ而も無之ものはや六七十年余ニ茂罷成事候得ハ□ニなり于今相見不申候富名腰村江差越并首里江罷登候訳ハ日帳

拔書之筋を以御見切可被下候

(二) 御尋<sup>ニ付</sup>而申上候口上

一、大城筑登之罷登<sup>リ</sup>候節崇禎年中之比<sup>ニ</sup>而順治十四酉年初而田舎人首里江居付御禁止以前之事<sup>ニ</sup>候得  
ハ何方<sup>ニ</sup>住居候とも存慮之儘成時節柄<sup>ニ</sup>而崇禎九寅年天下御下知を以初而宗門御改之時野国為被抱置由  
候子江抱置候哉孫江被抱置候哉其分ケ(訳)ハ承得不申候

(三)

(1) 大城筑登之儀新川与名を可申唱之處地頭所等相統之方ハ格別左様無之候人ハ何ぞ御法無御座心  
次第<sup>ニ</sup>候得ハ猶子不罷成前方より大城与申唱候故やハリ其名を唱通り為申儀<sup>ニ</sup>候。尤父子異名之儀  
当日世上<sup>ニ</sup>も相見申事候。況系図無之以前ハ猶以其風儀<sup>ニ</sup>而可為有之存候得ハ異名<sup>ニ</sup>付而何ぞ如之違  
礼有之間敷与奉存候

(2) 追加

且又大城本生方五代之祖具志川与申其中間列祖之儀大仲村渠親雲上、仲村渠親雲上、大城宇江親雲上  
<sup>ニ</sup>而大城迄五代<sup>ニ</sup>具志川父之儀<sup>ニ</sup>勝連阿まわり<sup>ニ</sup>離散之躰<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>之比玉城間  
切やまひ与申所江致越居子孫相続仕来候。具志川位階之儀慥<sup>ニ</sup>伝不申大仲村渠以下ハ地頭所等頂戴被

仰付段々御奉公を茂相勤為申由御座候。先祖以来右格式故大城筑登之事抑童子之節より御奉公罷出無懈怠勤来候処不慮ニ致早死子孫共今更残念至極ニ御座候

右件之本末故大城儀新川猶子ニ仕候儀旁以相応為申ニ而御座候。左候得ハ家柄ニ付而何そ立身之筋ニ而も無之故改名不申□□之儀深く氣を□□大城与唱通申候哉

(3) 又候哉康熙五午年以前ハ諸人系図未仰渡無之候。然者究竟之家柄ハ格別田舎人も首里江居付御奉公さへ相勤申候得ハ生産都鄙之差分無之何連も士ニ而同等之御取持故大城新川猶子ニ仕候儀相応為申時柄ニ而可有御座存候

但大城猶子ニ不罷成以前御奉公出申候

(四)

(1) 諸人家譜ニ相記置候御奉公之次第崇禎以前ハ言上写無之或御印判或家伝を以相記置候故家伝之儀ハ年月日之記等無之只何之年間与相見申候。尤崇禎以来ハ言上写有之候得共或落丁或紛失又ハ落丁無之のニも相洩候事共ハ家伝を以相記置候故是又年間斗相見候家譜も多々有之由候然者大城筑登之家譜ニ相立候御奉公之儀其内言上写ニ落丁紛失又ハ相洩候分ハ右通御系図座御格以諸人家譜同篇ニ知覚之通御僉議之上為被召立儀ニ御座候。抑大城御奉公之儀前代事ニ而も無之適養母新川親雲上妻康熙二十五年迄存生ニ而先真境名親雲上四十二之比迄孝養仕候又ハ大城妻同三十三戊年迄存命候而切ニ相



記置申候何ぞ別条無御座候条諸人家譜同格ニ被聞召届可被下候

- (2) 但新川嫡女金城筑登之妻女子老人致出生父金城早死ニ而彼妻之儀始終真境名親雲上より介抱仕康熙二十四寅年迄存生候故大城家譜之儀ニ付而は旁以委細ニ相記置申候尤右金城娘は当安谷屋親方前内儀ニ而故安谷屋里之子親母ニ而候

(五)

(1) 一、大城筑登之本来之儀先稻嶺親方年輩与申候勿論内外共御存知之事ニ而家譜之儀万事相伺相調差出為申事候得ハ弥家譜ニ書出之通少も別儀無御座候

(2) 一、大城宇江親雲上事男子兩人娘一人出生候。次男ハ新川親雲上猶子罷成候娘ハ屋嘉部子祖父屋嘉部親雲上妻ニ而候、然者嫡子大城筑登之与申候ハ父大城宇江意ニ相叶不申候而存生之時致義絶跡目之儀俾屋嘉部江相頼申候。屋嘉部儀本妻ニ男子無之一女致出生同村百名親雲上妻ニ召成百名親雲上俾猶子ニ仕考ニ而候処晩年ニ及候而故屋嘉部親雲上出生候故直子ニ跡目させ申候左候而大城宇江跡目之儀ハ百名夫婦江相授位牌等引渡申候。百名儀ハ直子無之候而故奥原親雲上娘幼雅(稚)之時より相育仲座里之子親雲上へ取合せ俾猶子仕候得共百名直子無之ニ付彼夫婦死後ニ大城宇江位牌之儀康熙五十二年癸巳故奥原親雲上より申請于今当奥原焼香仕候

(六)

一、新川親雲上脇子与申男子老<sub>レ</sub>人罷居為申由候得共新川実子之儀相（果）齡十二三歳迄其取立無之無沙汰召置申候其上自<sub>レ</sub>躰廢疾之者<sub>ニ</sub>而歳三十余迄見存<sub>ニ</sub>而候得共やハリ□篇<sub>ニ</sub>而相終申候

右通新川在命之節実子に相定不申候而□到死後ニ推量迄<sub>ニ</sub>而実子与一決仕筋無之故一門吟味之上系図<sub>ニ</sub>茂継載せ不申由承申候左候而女子老<sub>レ</sub>人致出生前照屋筑親雲上妻ニ罷成照屋与申男子老<sub>レ</sub>人女子兩人有之候処男子ハ相果女子ハ今存生<sub>ニ</sub>而御座候右男子照屋女子老<sub>レ</sub>人致出生今奥間筑登之女房<sub>ニ</sub>而候

申四月

## 解説

### 一、時

前編は己酉年となっている。江列按司から嘉陽親雲上までの代々が記されているが、武姓の嘉陽親雲上は康熙三十七年に始まるので、それ以後の己酉は雍正七年である。系図座規模帳の出来る前年である。その動きに対応したものであろう。武姓は康熙五十八年系図に江列按司を元祖とする事を許された。この時元祖、二世、三世を継ぎ足した。許されたのは請願したからであるが、それに対して、実際に証拠としてそのお墓のある事、お墓祭をしている事を系図座は調べたようである。系図に按司を

元祖に立てている毛（盛）氏、麻（真）氏、阿（守）氏は何れも按司お墓を守っている家々である。江列按司の祭をおこたるなというのは、系図に関連して子孫への注意書のようなものである。一方家譜の上では一門中になっても、共同の先祖祭がないと、やがては離れ離れになる恐れがある。それをいつまでも結びつけるためのものだったと云えないこともない。雍正十年に蔡氏三家が忠尽堂を再建するのもしそのようなものであろう。

後編では文中「康熙五十二年故奥原親雲上」とあるから申はその後の康熙五十五年丙申であらう。この年査氏国吉は訴えて元のように譜代にして貰った。このような訴えがあると、系図座では各々の家譜を比較検討して、家々の待遇取扱を公平にしていたようである。「家譜につきお尋ねがあった」と云うのも、他家で問題になった或る事柄につき決裁をした場合、これに似た様なのを如何すべきかという事からの御尋ねと思われる。例えば康熙六十年査氏は元祖を国吉之比屋まで三代さかのぼらせる事を許されている。これは武姓の先例によるのであろう。又按司末孫で当位まで昇進したものは、（後には申口座まで、となる）、里之子家に改めるといふ裁定を康熙五十五年に下した（麻氏兄弟たち）。然るにその実施がおくれて雍正七年から行われる。遅れて同じ年武姓も又按司末孫だといふので里之子家になった。系図座の考えはこのようなものであり、康熙五十五年は又このような年であった。

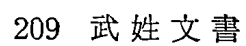
## 一、人

我々はこの文書をつきつけられた時、当初その實際を知らなかったので種々憶測したものであるが、この堂々たる答弁に、申開は立ったようである。人物については系図を見れば簡単に片づくのであるが、そのタネは後に記すしよう。

取調べの中心人物は大城筑登之である。この人のことを「私共祖父」と呼んで署名しているのは真境名親雲上、奥原親雲上、浦崎親雲上である。永安というのもあるが、これは嘉陽永安である。医師かと思われる。右は大城筑登之の孫共であるが子達にも真境名親雲上、奥原親雲上のいたことは、この人達の「成人内」大城宇江親雲上に預けたという字句によって伺える。それを証するように後の方(四(1)および五(2))で「先の」真境名親雲上、「故」奥原親雲上なる字句が見られる。

新川親雲上の身元については一言も述べていないのは、答弁する必要がなかったのであろう。つまり系図座も納得している人物ということになる。『那覇市史』にある「氏集」をみると、六番に武姓家譜の正統、支流を記している。その中に六世新川親雲上宗親を系祖とする家譜がある。これがここで取りあげられている家譜であろう。新川宗親というのは野国宗清の長男である。大城筑登之の子供達を船越から首里へ転入させるよう願出たのは宗清の子野国宗保である。康熙五年とあるからである。文中この人のことを叔祖父と呼んでいる。つまり新川親雲上から真境名親雲上に至る代々は、野国宗清から嘉陽永安に至るまでの代々と相互に親密であった様子が伺える。

人物の系図を示すと次のようになる。



## 一、大意（後編）

(一)(1)大城筑登之とその子供等がどうして首里籍であるか、に答えている。大城筑登之は幼少の頃（首里移住禁止令の出る以前）から首里へ奉公に出た。新川親雲上の掎養子になった。早死したので子供達は船越の祖父の元で、その死後は山川大屋子の元で育てられた事、当時札改があって居住地の札を貰ったこと、成人したので野国宗保が願出て首里へ呼戻した事、証拠として評定所日帳の抜書写を出している。答弁している真境名親雲上は康熙四十四年から六年間も評定所筆者をしていたから、その便利があったのであろう。

(一)(2)申四月というのは康熙五十五年である。

(一)(3)押札とおしづみの事、紙片に文を書いて貼りつけたもの。

大城筑登之とその子供達は首里籍内に住んでいた事、父親死亡により子供達は船越の叔父を頼って移住した事、この子供達は新川親雲上の孫であるというので野国宗保から評定所へ訴えて首里移住を願っている事、「右之通御談合相済」その手続を取った事を記している。

(一)(4)康熙四年札改のあった事、士の田舎にいる者は田舎で札を取れという事、子供等が田舎札を取った理由であらう。

(一)(5)(6)順治十七年の札改もこうであったでしょうという事で、札改の規則をかがけている。即ち田舎

住の士が首里へ移住して奉公している者は、その本人と両親以外は田舎札を取らせよと云う事である。これにより大城筑登之の子等は居所において田舎札を取ったのだという事であろう。

(7)大城筑登之の子供達が幼少の時船越村へ移住し、更に成人して首里へ引越したその訴書がある筈だから提出せよという事、田舎居住の士は田舎札を取らせよという事でそうなので、又首里移住の件については訴書があったと記されています。その時の書類が後々証拠になるとは思いませんでしたので今はございません。万事評定所日帳抜書ですまして下さい。このような調べをするのは本来の身分が百姓であるのか、士であるのかを調べているのであろう。

(二)順治十四年田舎人の首里居住禁止令が出た。大城筑登之はそれ以前崇禎年間の移住ですので、何所に住んでも良いという時代であった。

第一回の札改は崇禎九年で、この時は野国宗清の所で札を貰っている。抱えるというのは雇うという意味だが、ここでは子として、又は孫として届けた様な意味になっている。

(三)(1)大城筑登之が新川親雲上の簪養子になったというのに何故姓が異なるのかという事への答弁である。地頭所を相続する者は同じ姓になるでしょうが、そうでない人は規則がないので勝手次第です。この様なのは世上にも例があります。系図のない頃は一層その様なものだったでしょう。

(三)(2)大城筑登之の先祖代々の事を述べ、地頭所を頂戴した人もいる事を述べている。従って新川親雲上の養子に相応する。格式の低い者が養子になったのではない。

(三) 康熙五年に始めて系図指出の仰渡しがあった。それ以前は田舎人も首里へ居住御奉公さえすれば、生産都鄙の区別なく同等の士であった頃だから大城筑登之が親川親雲上の養子になっても一向おかしくない。

(四) (1) 「言上写」というのは崇禎以前はなかった。それ以後はあるけれども落丁したり、書洩れがあったり或は紛失したりしている。従って、家譜に代々の御奉公の次第を記すのに家伝を以て補うのが普通で何々年間となっている。大城筑登之御奉公之次第が言上写のないのは知り覚の通り記したもので、当時系図座の御格を以て御僉議を以て許された記事であります。大城御奉公の事はその養母(新川親雲上妻)が康熙二十五年迄存命であり、大城筑登之妻も同三十三年迄存命でしたので、知っている通り記したのです。

(四) (2) 新川親雲上の子孫について訊している。前出系図の通りである。

(五) (1) 大城筑登之は先の稲嶺親方盛方に童子奉公をした事内外とも御存知の通りです。

(五) (2) 大城筑登之の実父大城宇江親雲上の跡はどうなったか。前出系図の通りの事を云っている。

(六) 新川親雲上の脇子という者についての答弁。系図へすがり載せるとは、血筋の者を後から系図に入れる事、血筋でないのをそれらしく入れるのを掠入という。

## 一、評注



大城筑登之は幼少の時野国宗清をたよって玉城間切を出て首里へ奉公に出た。田舎人首里へ居付禁止以前の事で、正当に首里籍を得ている。早死したのでその子等は玉城間切の祖父に養育された。成人したので康熙四年野国宗保が評定所へ訴えて首里へ呼び戻した。長男真境名は康熙二十五年四十二歳というからこの時二十一歳、直ちに奉公して康熙二十九年には四十五歳即ち親雲上にはなっている頃である。この年家譜を許されたとみられる。その時の家譜が康熙五十五年に問題になったというわけである。問題の中心は大城筑登之の身元、御奉公之次第、新川親雲上との関係、又新川の脇子についてである。つまり掣猶子という事が問題になっているとみえる。掣猶子の相続が認められないと、大城宇江親雲上を元祖にしなければならぬ（譜代になるか新参になるか）。今日の結果から見て許可になったことがわかる。

それから十五年位して系図座規模帳が出来るのだが、田舎人を士の養子にしてはいけないとか、新参の者を譜代の家の養子にしてはいけないとか、他系の者を養子にしてはいけないとかきめられる。その吟味の始る頃であろう。

昔は家統という觀念がうすく、身を寄せあってお互い生活することが第一であつたらしい。それで気に入った子と一緒にくらすのである。女の子、つまりその夫も一緒にくらし、終には家財もやってしまうというふうである。そういう時代の事を掣猶子になったと解釈したのは、家統をつぐという觀念でとらえている。つまり系祖を新川まで遡らせて譜代籍になっているのである。幼少の頃父に早死

され母や母の一族との交際が強く印象づけられた真境名が、母を通して新川へ遡らせたのは人情の自然かもしれない。蔡氏渡久地家譜のこの頃の人に聶養子となっている人のあるのもこの類であろう。尚、新川が野國宗清の長男でありながら相続人になっていないのは、その頃長子相続ときまっていなかった風習から来ているものと思われる。

一、その他

この口上書について興味のあるのは、士農不明確な時代の様子がわかる点にある。思いつくままに記すと、

- 一 士の田舎居住する有様。
- 一 士の縁組の有様。
- 一 男の早死の多い事。
- 一 今日でいう聶養子の形の多いこと。
- 一 系図の御奉公の次第の記し方。
- 一 崇禎以後は口上覚のあること、不備な事。
- 一 父子異名の事。
- 一 札改の事。

- 一 後に西原間切になる翁長村が当時首里の域内だった事。
- 一 大与座の出来る迄は評定所で民事を取扱っていた事。

〈参考文献〉

『那覇市史』資料編第一卷五

- 六世 新川親雲上 一三六頁
- 七世 大城筑登之 一五九頁
- 八世 真境名親雲上 二〇四頁
- 九世 真境名親雲上 二六六頁